

媽祖と観音の諸類型

張

凱

はじめに

十世紀以降に中国の福建省において成立した媽祖信仰は、航海安全、子授けなどの利益がある。北宋徽宗から扁額を賜った後、次第に「護国庇民」、「弘仁普濟」などの封号を与えられた「媽祖」という俗称が誕生する前、媽祖は天妃や天后などと呼ばれていた。媽祖は、主に航海・漁業に従事する者の命を守る女神である。媽祖信仰が諸外国に伝播し、地域化を遂げた背景には、媽祖のもつ「海難から人々を救う」という救済者としての特質が深く関わると考えられる。また、積極的に他信仰と習合したという特徴は、媽祖信仰が多くの新宗教のような一時流行のみで終わらず、現在まで信仰され続けてきた要因と考えられる。

他信仰との習合は、言うまでもなく媽祖信仰の重要な特徴である。その中でも、仏教やそれ以外の様々な女神信仰からの影響を受けていることに注目すべきである。女神信仰に注目して見れば、媽祖信仰においては、誕生して間もない時期から既に他の数多くの女神信仰との相互的な交流が行われ、更に習合した事例も存在している⁽²⁾。

現在は女性的な菩薩とみなされている観音も、媽祖信仰との交流が深い。図像や物語などにおいて、媽祖信仰は観音信仰、特に女性化した観音からの影響が大きい。また、この影響は、観音信仰だけではなく、観音信仰と関連を持つ他の信仰文化からも受けたものである。このような、観音信仰を媒介

とした信仰文化間の交流状況は、媽祖信仰の研究に対して、新たな視点を提供する。

媽祖と観音が習合した原因は、主に二つあると考えられる。一つ目は、媽祖とマニ教の関係である。媽祖の姿については観音、特に白衣観音が参照された可能性が高い。媽祖の図像のみを見ると、右手に柳の枝・拂子・玉如意などを持つほか、白衣を着た姿も多い。白い衣を頭から被り、身を包むという様子は、マニ教の女神・女性信者、仏教の白衣観音、媽祖信仰の媽祖における共通点とも言える。従って、媽祖像の原型はマニ教の女性信者であった可能性もある。そうした信者は布教が禁止されていたマニ教を宣伝するために、仏教徒を自称し、最初の媽祖廟においてはマニ教の神を本尊として祀っていたとする説もある。実際に唐武宗の会昌廃仏（845）の際に、仏教と同様にマニ教も弾圧されたが、難を逃れた一人のマニ僧が福建の泉州に避難した。彼が福建に潜伏してマニ教を村人たちに伝え、一種の秘密結社のようなかたちでマニ教は存続していた。後に観音、媽祖と関係を持つことになる泗州仏もマニ教とは関連性がある。二つ目は、従来から指摘されている、マニ教を介さない仏教的要素の混合を通じた観音と媽祖の関係である。

本稿では、マニ教を介すことなく媽祖と観音が習合した原因の検討により、媽祖と習合している観音の諸類型を考察する。

一、媽祖と観音の関係

媽祖と観音の関係を想起させた原因は、両者の間に「海難救済」、「慈悲」、「母性」などの多くの共通点があることである。仏教經典によれば、『観音經』（『法華經』觀世音菩薩普門品）が、媽祖と観音の関係の原点と考えられる。両者の関係について、以下の観音に関する三種類の説がよく知られている。

一つ目は、媽祖が観音の化身という説である。元代の黃四如は『聖墩順濟祖廟新建蕃釐殿記』の中で「即補陀大士之千億化身也」と述べ、媽祖が観音の無数にある化身の一つであることを明白に示している。また、明代の『太

上説天妃救苦靈驗經』は「天の肩を並べられる聖后と称する媽祖は、観音の化身である。湄洲に神聖な事跡があり、神通力を使い、海難救済に最も靈驗を持つ。そのため、順濟という封号が与えられた。三十二の相があり、三十二の相はすべて端正なものである。人々が媽祖の名を呼ぶと、必ず救いがもたらされる。非常に聖なり、靈驗である」と述べ、媽祖の設定の中に観音の特徴が確認できる。後の時代の人々が観音菩薩と媽祖の関係の深さをより強調したと考えられる。媽祖廟では一般的に観音が祀られる。

二つ目は、媽祖が観音の弟子という説である。『天妃娘媽伝』によれば、媽祖は観音の指示により、自ら転生先として徳望の高い林氏の家を選んだ。生まれた時から、媽祖は一般人と異なり、欲と執着の少ない子であったことから、篤信の在家仏教徒のような特徴を帯びていた。そのような媽祖を見て母は心配し、ある日、夫に「他の家に産まれた娘は、礼儀作法の問題を指導すればよかった。何故、うちの娘は一般人と違うのでしょうか」と言った。⁽⁴⁾つまり、媽祖が他の女性と最も異なる点は、女性にとって相応しくないような、情欲を捨てて善行と利他行を積むという「衆生救済」の仏教的性質である。媽祖がこのような性質を持つ理由は、媽祖が自ら仏教に親しみ、また、観音も彼女に仏法を教えたためと考えられる。これは、『天妃娘媽伝』の「第二回 玄真女得佛真傳」に示される話に基づく説である。この伝承によると、媽祖のモデルであり、実在した人物とされる林默娘^{りんもくじょ}は、観世音菩薩に出会い、その際に、仏教の法門を授かったとされる。これによって、観音は天上界で媽祖に伝法しただけではなく、人間界においても媽祖を指導していることが分かる。『天妃娘媽伝』の視点から見れば、元々も在家の仏教徒としての媽祖は衆生救済の道を目指すため、観音を信仰し、さらに結婚の申込みも断ったと考えられる。『天妃顯聖録』『湄山飛昇』は媽祖の性格を「心好清浄、塵寰所不樂居」と述べ、生涯結婚しなかったとする。この伝承によって媽祖が観世音菩薩の弟子であるという説が定着したのである。

三つ目は、媽祖が観音の脇侍龍女であるとする説である。注意すべきなのは、媽祖は様々な呼称を持つことである。「龍女」と呼ばれるようになった

三つの原因は、媽祖の生涯に関係がある。そのため、諸説の時系列と媽祖が観音の脇侍龍女になった原因を推測してみる。

(1) 生前の媽祖を名門の莆田唐九牧林の一族と関連付け、その一族の子孫であるとする説である。この名門一族が九牧林とよばれる原因は、門内において九人の有望な人材を育て上げたことによる。人々はこの息子たちを「九龍」と称賛した⁽⁵⁾。媽祖の父林願は「都巡檢」であり、常に部下たちを連れて海に出、福建省（興化軍）における沿岸部一帯を視察していた。媽祖は生涯独身であり、ある日、自分の死を予感し、家族と別れた後、湄洲島の最も高い場所に登り、女神になった。その日、多くの人が彼女の昇天する様子を目撃したとされる。ところが、宋代の廖鵬飛、丁伯桂などは媽祖の出身について、「林氏」とのみ記しており、特定一族を指摘しているわけではない。元代の文献では媽祖を莆田都巡君の娘とする説が見られはじめ、少なくとも明代から媽祖の家系を示す文献は存在する⁽⁷⁾。

(2) 媽祖が一般家庭に生まれた娘とする説である⁽⁸⁾。その場合、家族は漁業に従事していたと説かれる。しかし、彼女は生まれた時から不思議な霊力を持ち、特に気候などの複雑な変化を予知し、水を統制し、治療の能力が高いとされた。やがて、村で巫女のような存在になったとも記載されている。そして、彼女は生涯独身であり、海難に遭った人を救うために亡くなったとされる⁽⁹⁾。各地で靈驗を顕かにするため、後に朝廷の認可を得た。

(3) 龍王の娘とする説である。桑悦『太倉州志』によれば、明らかに媽祖は元々人間ではなく、本質は龍である。註7に示したように丁伯桂「順濟聖妃廟記」によれば、媽祖は亡くなって以降、「龍女」と尊称される⁽¹⁰⁾。一般的には各地域の海や江を管理する龍王が媽祖の父として採用されている⁽¹¹⁾。根拠として、媽祖廟は龍宮と天上界に倣って造られることが挙げられる。また、湄洲祖廟においては、四海龍王も祀られている。このような状態になる一つ目の原因は、恐らく媽祖信仰は最初から海神信仰と習合する必要があることを意識していたためと考えられる。二つ目の原因は、元々存在した龍女信仰が主動的に媽祖信仰と習合したためである。例として、宋代の山東省に位置

する靈祥廟に関する記述の内容を見る。清・顧炎武の『日知録』巻25「湘君」によれば「又元劉遵魯漠島記曰、廟中神妃、相傳為東海廣德王第七女。夫海有女、則山亦有女、曷足怪乎？」となる。⁽¹²⁾ 地元の人たちは、自分たちが信仰する龍女が媽祖と同じ女神、あるいは天妃に封じられたと主張した。

上記のような経緯を踏まえ、媽祖信仰は信仰圏を拡大させ、さらに水に関わる利益と勢力を強めるため、脇侍龍女説を作ったと考えられる。ところが、媽祖が観音の脇侍龍女であるとする説は、代々口頭で伝授されてきた民間伝説を起源とするため、具体的な成立時期が推測できない。ただし、媽祖信仰の龍に関する他の諸説より遅く成立したものと考えられる。また、媽祖が先に龍王の娘になり、その後、観音の脇侍の龍女になった可能性が高い。

媽祖の伝説を確認すれば、彼女は脇侍の龍女になる素質を持っていたことが分かる。観音の脇侍である龍女は、女人成仏の龍女という説が存在するため、『法華経』『提婆達多品』の「龍女伝説」を参照する。

『正法華経』(竺法護訳)現代語訳⁽¹³⁾

溥首答曰。在於海中惟但敷演正法華經。智積又問。其法甚深尊妙難及。能有尋時得佛者乎。溥首答曰。龍王有女厥年八歳。聰明智慧與衆超異。發大道意。志願弘廣。性行和雅而不倉卒。便可成佛。

文殊菩薩は、「私は海の中において、『正法華経』のみ説示する」と答えた。そして、智積菩薩は、「その教えは奥深く、尊くてかつ優れ、得難い。間もなく仏果を証得する者がいるか」と問った。文殊菩薩は答えた。「龍王には娘がいる。彼女の年は八歳であり、賢く、智慧が満ち、他の衆生を超え、他の衆生と異なる。彼女は菩提心を起こし、志向と誓願が広大である。彼女の本性と所行は和順・高雅であり、性急ではない。彼女は成仏することができる」と。

媽祖と脇侍の龍女の類似点をまとめる。

(1) 同じ龍王ではないが、前述のように、媽祖も龍王の娘である。

(2) 媽祖は非常に賢く、他の衆生と異なり、菩提心を起こし、志向と誓願が広大である。『天妃顯聖録』によれば、媽祖は観音によって授けられた子であり、⁽¹⁴⁾ 仏教に親しみ、誦經礼仏の修行を毎日行うという、姉たちとは非常に異なる性質を帯びていた。媽祖が十三歳の時、道士から「もし仏性が十分に備わっているなら、衆生が悟りの果を得られるような衆生救済をするべきだ」と勧められた。特に、『天妃顯聖録』において、媽祖信仰における救済には、衆生の命の救済だけではなく「渡人正果」も含まれている。⁽¹⁵⁾ また、『天妃娘媽伝』の視点から見れば、媽祖は衆生救済の道を目指すため、観音を信仰し、在家の仏教徒として結婚の申込みを断ったと考えられる。『天妃顯聖録』「湄山飛昇」は媽祖の性格を「心好清浄、塵寰所不樂居」と述べ、生涯結婚しなかったとする。

興味深いのは、欲の厭離⁽¹⁶⁾という仏教的な考え方を、儒教は人間の自然の情に反すると考えることである。仏教の排斥は、すべて人倫の道という点から行われている。そのような価値観に反して、両書の親孝行の記述は変化している。儒教の中に「三従四徳」という戒めや「不敢不致如父之意」などがあるように、親の言う事に服従することは孝行の基本である。特に、結婚のようなことは、自らは断わらず、父母の命令や仲人の取り持ちに従うものであるとされる。⁽¹⁷⁾ 父母の命に反抗できるのは、父母の行為が不義である時に限る。さらに、媽祖が最後に自ら死を選ぶような記述は、不孝の一種である。

しかし、『天妃娘媽伝』の主人公としての媽祖は、儒教の教えに従った一般的な女性の生活をしていなかったものの、最後には儒教を支持する朝廷にも認められる女神になった。『天妃娘媽伝』は、媽祖の口と行為を通して、一部の儒教思想に反論を提示した。皮肉なことに、このような媽祖が一般人を救済しているのである。この側面から、作者は儒教思想よりも衆生救済を支持していると推測できる。

(3) 女人救済である。宋代から既に「龍女成仏」(女人救済)「衆生救済」「地獄救済」などの思想が流行していた。従来より、成仏できないとされて

いた女性を救済するために、女性を男子に変化させるという物語がある。例えば、『妙法蓮華経』『提婆達多品』及び『無量寿経』の第三十五願、『大阿弥陀经』における女人救済についての「転女成仏・变成男子」という説である。『天妃顯聖録』と『天妃娘媽伝』の「天妃誕降傳」は、ともに「道士曰：『若具佛性，応得渡人正果』。乃授妃玄微秘法。」という場面がある。媽祖が仏性を備えることを述べ、観音によって仏道へ導かれたとする。つまり、媽祖の男性に劣らないという特色について、人間として生まれ、また女神になった後も、男性神と同様の能力を持つという点に加えて、「転女成仏・变成男子」も暗示したのであろうか。これに関して、媽祖を観音の脇侍としての龍女とする説に注意すべきである。『妙法蓮華経』によれば、女性には「垢穢」と「五障」があり、女性の姿のままでは成仏できない。『天妃顯聖録』と『天妃娘媽伝』は媽祖が身を清らかにし、六塵を洗淨したことなどを数多く述べている。しかし、『無量寿経』の第三十五願によれば、念仏を称えた女性は、臨終の瞬間に、往生浄土を願い、仏名を称すれば仏の願力によって男性の身へと変化し、極楽浄土に往生し、極楽浄土でさらに仏法の修行に励んだ後に成仏できるという。媽祖もこのように毎日念仏している。後に弥勒信仰と繋がり、例えば、『天妃娘媽伝』には、「慈悲無量功德，果阿弥滿世」という文言が何度も出てくる。明代において、媽祖信仰は、法華経，浄土教，禅宗から影響を受けたと考えられる。

媽祖信仰は基本的に衆生救済の信仰であるが、当初は海難救済を主としており、漁業，貿易，遠方への旅などに携わる民衆にとって重要な利益があったのは言うまでもない。朝廷側が媽祖に加封した理由を挙げれば、ほぼ風水害・海賊・漕運などの海上安全の功德である。古代においては、船に乗り、大洋で悪風に遭う海難救済の対象者は、多くの場合男性に限られていたであろう。後に増加する女人救済に関する様々な利益は、初期の媽祖信仰における海難救済では対象外とされてきた女性を救済の対象とするために付加されたと考えられる。媽祖信仰における女人救済の子授け，安産などの利益は後に女性化した観音から継承されたものである。

媽祖と観音の関係について、上記の他、例えば『天妃顯聖録』『天妃誕降傳』に、媽祖は観音によって授けられた子と述べられていることである。また、『天妃顯聖録』『序文』は媽祖の本質について、「相傳謂大士轉身」と述べた。轉身は輪迴転生の意味だが、『天妃顯聖録』の内容から見れば、観音の化身と考えても妥当である。さらに、媽祖は観世音菩薩と混淆されつつ信仰されて、中国仏教において神格とみなされたという解釈もある。実際に、一部の媽祖廟と仏教系の寺院においては、媽祖と観音の信仰は共通するものとなっている。

興味深いのは、袋中良定(1608)、黒川道祐(1691)、西川正休(1720)などの資料により、日本側がどのように媽祖と観音を結び付けたのか、その内容が記録されていることである。⁽¹⁸⁾

二、子授けの利益と媽祖

「白処」をモデルとして誕生し女性化した白衣観音菩薩は、送子観音、南海観音、慈母観音に影響を与えた。そのため、表面的にみれば、三者の姿が非常に類似するため、混同して信仰される場合もよくあった。特に、送子観音と白衣観音については、同じ女神と認識している人が多かった。一般的に、中国と西欧諸外国の貿易往来により、聖母マリアと習合した慈母観音が誕生した時期は、三者より遅い元代からであると考えられる。ここでは、子授けの利益をめぐり、媽祖と送子観音と慈母観音の間に存在する関連性について論じる。

まず、送子観音は「送子娘娘」「送子老母」とも呼ばれる。⁽¹⁹⁾これに関する諸伝説については多くの例を挙げることができる。唐代の『法苑珠林』巻52、宋代の『冥祥記』第102話と『太平広記』巻111、明代の『銷釈白衣観音菩薩送嬰兒下生宝卷』などは、ともに居士卞悦之が観音に祈ることで子宝に恵まれたという話を記載している。⁽²⁰⁾同じく宋代の『圓通三慧大斎道場儀』巻4「求男生男」に、卞悦之が子宝を望んで観音菩薩に祈る話以外に、晋代の王

珉という男は子供がないため、嘗て観音に祈ったという話がある。⁽²¹⁾さらに、『観音経』は子宝を授かる利益を持つ經典として知られるようになる。清代の『観音経持驗記』巻1・2によれば、唐代、ある高齢者には子供がなかった。ある日、年老いた僧に遭った事をきっかけとして、『白衣観音経』を得てから、専らこの經典を唱え始めた。数年後、遂に三人の男児を得た。元代、王玉という40代の男には子供がいなかった。ある日友人から『白衣観音経』を得て、毎日専ら『白衣観音経』を唱え始めた。すると、妻の母は白衣を着て、金冠を被った人が一人の男の子を連れて来る夢を見た。妻の張氏はその後に妊娠する。明代の万暦庚寅年（1590）、『了凡四訓』（『陰騭録』）を著した袁了凡は、『白衣観音経』が子宝に恵まれるための經典であると明示した。⁽²²⁾また、清代の『陔余叢考』巻34によれば、許洄という人物の妻が難産のため、非常に危険な状態になった。許洄が心の中で観音菩薩に祈ると、白衣を着た婦人が彼自身に金色の木龍を渡す様子を恍惚として見た。その後、妻は無事に男の子を生んだとされる。⁽²³⁾

以上の例により、三つの注意すべき点を提示する。第一に、観音に関する子授けの利益という観念が、唐代から既に存在したことである。それは、『観音経』をひたすら唱えるならば、子を得る事が出来るというものである。従来、観音菩薩は三十三の姿に変化し、子授けを含めたすべての願いを叶え、様々な困り事を解決する能力を持つと見なされていた。⁽²⁴⁾このため、『観音経』に説かれる所の観音が滅するとされる七難において明確に「難産」と記述されなくとも、幅広い利益の中には次第に「難産」も出てくると考えられる。ただし、観音に祈ることで子宝に恵まれると説いた『観音経』は、後に『白衣観音経』になり、内容も簡略化される。例えば、『白衣観音経』について、『観音経持驗記』巻2には「経呪原出大藏。名隨心陀羅尼。受持者。一切祈求悉令滿足」と記述されている。この点から、最初は特定の種類の観音が指定されるわけではないが、時代を経て、白衣観音が子授け専門の菩薩になったと推定される。

第二に、観音に祈ることで子宝に恵まれるための条件が設定されている。

『妙法蓮華經』巻7においては「若有女人、設欲求男」と記述された。ところが、上記の例と同様に、観音に祈る信者は常に高齢者、また、子がない男を主人公とする傾向がある。彼らが千回ほど經典を唱えた後に、自分ではなく、女性の家族が観音の夢を見る場合が多い。また、彼らが常に男の子を願うことで、観音の「求男生男」という子供の性別まで決められる能力を強調している。

第三に、『陔余叢考』を見ると、観音の安産祈願と送子祈願が関連的に描かれている。經典では観音の名を繰り返し唱える「念彼観音力」の性質が強調される。媽祖と白衣観音との関係は前節において既に検討した。興味深いのは、送子観音に見られる、媽祖と白衣観音の間に存在する間接的な関連性である。

(1) 媽祖と観音の習合した形：白衣観音と、多くの類型に分かれる観音と媽祖信仰思想について、媽祖信仰は観音信仰から総合的には衆生救済の思想を受容している。一方で、女神としての媽祖は各々の与える利益により区別された類型の異なる観音とそれぞれ習合している。つまり、媽祖と観音が習合した例について、広い視野で見れば、媽祖と観音本尊とが習合した例ももちろん含まれる。一方で、部分的に見れば、媽祖と南海観音、白衣観音などの類型が異なる観音と習合した例もある。

(2) 子授けを求める古い民間習俗：媽祖と観音を祀る寺廟においては多くの場合ともに行われる。廟内の観音菩薩は主に白衣観音である。以下に二つの例を挙げる。

(ア) 廣州、南海などの地域を中心とする「生菜会」

「生菜会」については、順德『順德県志』、『廣州府志』に記録されている。⁽²⁶⁾特に観音と媽祖の誕生日に両者に対して祈り、生菜を食べ、サザエに触ることで、子に恵まれるという説がある。生菜は「生子(仔)」や「生財」の発音と類似している。⁽²⁷⁾つまり、子を産むことと財産を増やすことである。生菜会を開催するときに、寺廟関係者は、事前に、観音廟前にある「海」を象徴する小池にシジミとサザエを入れる。人々は、小池に手を入れて最初に触れ

たものを取り出す。これは、観音に祈って恵まれる子の性別を判断する儀式である。シジミは女の子、サザエは男の子を得るとされる。この儀式は、媽祖と観音が海との関連性を持つことを明確に示している。

(イ) 楊柳崇拜

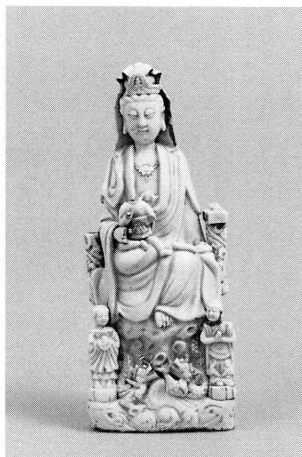
中国においては、植物崇拜による子授け祈願が存在する。女性のように子を産む能力を持っていると見なされる植物は、蓮の実と楊柳などがある。楊柳は女性の生殖能力と子孫が絶えず長く栄えることの比喩に用いられる。蓮は花托の中に実が多く成るため、子供が多く生まれ家が繁栄するようにという子授け祈願である。楊柳と蓮は共通して観音のイメージが強く含まれる植物である。楊柳の俗習について、古来より、楊柳の葉を用い作られた菓子を食べれば、子が得られるという話がある。それ以外には、「拝柳求子」という、楊柳の前で祈り、子を得るという俗習もある。

以上の原因により、元々衆生の除病救済を本誓とし、常に右手に柳の枝を持ち、白衣を着た姿で、別名が薬王観音とされていた楊柳観音は、送子観音の一つの類型となった。一方で、媽祖に関する古い図像のうち、片手に楊柳の枝を持ち、もう片方に薬缶を持つ場合がある。恐らく、観音がかつて媽祖の母王氏の夢に現れたとき、丸薬を王氏に食べさせ、「これを飲めば、あなた達の善行の果報を与えましょう」と告げたとされることから、子授け物語に関係があると考えられる。また、観音菩薩が持つ柳の枝で浄瓶の水をまくことで、雨を降らせる雨乞い利益と除病利益は、媽祖信仰にも見られる。

除病利益に関しては、媽祖が観音から薬を作る方法を学ぶという物語もある。また、除病利益の中の疫病退治において、観音が柳の枝で浄瓶の水をまく姿はよく見られ、この方法自体が俗習の一つである。媽祖に関する古い図像には、媽祖が片手に楊柳の枝を持ち、もう片方に浄瓶を持つ姿も見られる。また、「救民」という思想が現れる「煉薬救民」の図において、観音は弟子である媽祖に薬を作る方法を教えた²⁸⁾とされる。白衣を纏う観音が持っている器具は、浮塵という道教の法器である。三教交渉の影響を受け、仏教的な神仏の図像にも浮塵が描かれ始めた。浮塵は、煩惱断捨、妖怪退治、除病救済

などの効用がある。つまり、媽祖は楊柳観音とも習合している。

図：中国福建省徳化窯マリア観音⁽²⁹⁾



最後に、マリア観音像とマリア媽祖像の関係について触れておく。幼児キリストを抱く聖母マリアの姿に酷似した観音像は図像の中によく見られる。聖母マリアが観音、媽祖と習合した原因は、「慈悲」、「子授け」、「受胎告知」である。

『聖書』の中に登場する実在の人物としてのマリアの慈悲は、彼女の母性的な愛が世間の人々にも伝わり、すべての人を母のように愛することである⁽³⁰⁾。神聖なる聖母の愛であると考えられる。中国においてマリアに関する子授け祈願がいつから誕生したのかについて、具体的な記録は残っていない。しかし、1515年前後から、中国式の聖母像は既に存在していたとされる。例えば、Carlo Crivelli (1430-1493年以降)の聖母像や Jean Perreale が制作した聖母像などが例に挙げられ、元末明初から新式の聖母に類似する観音像が誕生したと推測されている。弥永信美 (2002) によれば、1548年にマラッカに流れついた日本人ヤジロウの口述により作成された「日本事情報告書」は赤児を抱く女性化した観音像の存在を記録しているという。弥永は「赤児を抱く聖母の磁器像が、遅くとも十六世紀前半から中国で造られ、もしかするとそれ

よりさらに百数年以前から作られている可能性」を提示する⁽³¹⁾。Arnold (1999, p. 151) によれば、フランシスコ会によって中国にもたらされた聖母像の原型が中国における女神としての観音像に吸収され、時を経て観音の新たな型である子安観音像が誕生したという⁽³²⁾。以上の先行研究を踏まえ、遅くとも十六世紀から聖母像と中国における子安観音像は互いに影響を与えたと推測する⁽³³⁾。白磁を製作するのは、マリア観音像の特徴である、肌の白い欧米人と神聖かつ純潔な聖母に対するイメージだと考えられる。古代、中国でも日本と同様に宣教師追放令が出され、キリスト教を弾圧した状況にあった。しかし、重要な貿易港を有する福建省は常に特例とされ、特に南部に位置する徳化窯は、宋代から神仏の像を制作してきた重要な拠点である。多くの子安マリア観音像は福建省で制作されたものである。

赤児を抱く姿は同様に赤児を抱く送子観音とも対応する。媽祖に関する図像にはこのような姿は確認できなかった。「受胎告知」とは、周知のように、大天使ガブリエルが聖母マリアのもとを訪れ、彼女にキリストの受胎を告げたという話である。当時、まだ処女であるマリアは処女懐胎の奇跡によって生まれた子にイエス（神の子）と名付けた。生涯結婚しなかった媽祖の「天妃降誕」とこのマリアの「受胎告知」の類似点は、超越的な他者から将来神になる子の誕生を告げられることである。

マリア媽祖像の制作時期については、次のように考えられる。まず、家康がキリスト教を「禁教」にして以降、中国のキリスト教信者はマリア像を媽祖像のように造り、このマリア媽祖像を日本に住む華僑たちとキリシタンに売った。次に、1925年、中治稔郎が日本統治時代の台湾で設立した神道系の天母教はマリア媽祖像を祀っている。また、フィリピンにおける一部の教会の礼拝堂には、媽祖像を祀るほか、マリア媽祖像もあるようだ。現在、台湾やマカオなどの媽祖廟においてはマリア媽祖像が祀られている。

終わりに

『太上説天妃救苦靈驗經』、『天妃顯聖録』などは、媽祖の誕生伝において、観音と媽祖の関係を述べている。媽祖と観音の関係について、媽祖が観音の「化身、弟子、脇侍龍女」であることの三種類に分類できる。

観音は種々の身相を持つが、媽祖と関連性を持つ種々の観音は、海難以外にも、特に子授けのような女性の悩みを解決できるイメージが強い。ところが、現在の媽祖信仰において顕著な「子授け」、「安産祈願」、「縁結び」などは、女性化した観音信仰と習合した後に盛んになった利益であると考えられる。媽祖は、最初は白衣観音と習合した。そして、白衣観音を通して、徐々に子授けや子安などの利益が加えられ、南海観音、送子観音などと習合し始めた。一方、聖母マリアより誕生した聖母観音と聖母媽祖は特別な例である。側面的に見れば、観音は媽祖と習合したことにより、女性としての観音のイメージをさらに強調した。仏教と媽祖信仰は最初から衆生救済という目的を掲げているとされるが、実際には、両者とも初期は男性救済を重視する傾向があると考ええる。

媽祖と観音の間にある関係は、歴史地理の観点から、中国と日本の双方における観音信仰の詳細が比較されなければならない。また、水陸法会や女人救済の水子供養、目連救母などについては、更なる研究の余地がある。

参考資料

蔣維鏞（1990）『媽祖文献資料』、福建出版社

明・呉還初（1990）『天妃娘娘媽』、上海古籍出版社

明初・撰人不詳（1992）『太上説天妃救苦靈驗經』藏外道書（全36冊）第3冊、巴蜀書社

明・撰人不詳（1992）『太上説天妃救苦靈驗經』、巴蜀書社刊

弥永信美（2002）『観音変容譚：仏教神話学：Ⅱ（仏教神話学(2)）』、法蔵館

古田紹欽（1959）「仏教が非人倫的であると云ふ謗難に対しての仏教者の反論—

反排仏の護法思想」『北海道大学文学部紀要』7, pp. 1-15

- 中村哲 (1976) 「本朝媽祖渡来考」『えとのす』第6号
- 田上太秀 (1990) 「変成男子思想の研究」『駒澤大学禅研究所年報』通号1, pp. 41-61
- 白土わか (1991) 「『法華経』・『無量寿経』・『転女成仏経』における女人救济」『国文学：解釈と鑑賞』, pp. 116-123
- (1998) 「仏典に現われた女性達」『女性と仏教』通号30, pp. 199-257
- Valerie Hansen (1999) 包偉民訳『変遷之神：南宋时期的民間信仰』, 浙江人民出版社
- 藤田明良 (2021) 「東アジアの媽祖信仰と日本の船玉神信仰」, 国立歴史民俗博物館研究報告 (223), pp. 97-148
- 菊地章太 (2017) 「民間信仰と佛教の融合—東アジアにおける媽祖崇拜の擴大をたどる—」『東アジア仏教学術論集』巻5, pp. 29-56
- 白景皓 (2017) 「竺法護訳『正法華経』の〈龍女伝説〉(白)」『比較論理学研究』14, pp. 123-139
- 王燕萍 (2020) 「宋代における媽祖信仰の実像」『都市文化研究』Vol.22, pp. 24-38

註

- (1) 媽祖が夫人, 天妃, 天后, 天上聖母 (簡略には聖母) と呼ばれるのは正式に封号を下賜された後である。それ以前は, 系譜にしたがって六房老姑婆, 他に娘媽, 聖妃などと呼ばれていた。媽祖と呼ばれ始めた時期は清代からと推測されている。
- (2) 媽祖信仰はアジアの諸宗教の神仏と習合した例が多い。特に観音と関連性を持つ神々は, 同様に媽祖とも関係を持つ場合もある。
- (3) 靈慈廟「観音指法・仙女降凡」(清)の媽祖図と「煉菓救民」『靈慈廟媽故事壁画』第15図、p.138参照。また、江南式の白衣観音 (右) : 明代の朝廷画師の丁雲鵬によって1609年に制作された作品である。『故宫書画図録8』、p.331参照。
- (4) 「第九回 玄真女機上救舟」: 自幼至長, 薄嗜慾, 寡言笑, 遊於凡世之中, 而不染塵世之氣。性好祀観音菩薩, 乃絵一象, 朝夕拜。(略) 其母告其父曰: 「人家産女, 無非無儀, 奈何我家産女, 独此怪異。」
- (5) 李丑父・1259年, 「靈惠妃廟記」: 妃林氏, 生于莆之海上湄洲…御災患有功德於民, 宜秩典祀, 而地之相去則有疑焉? 或曰: 妃龍種也, 龍之出入窈冥, 無所不寓, 神靈亦無所不至。
- (6) 都巡検と都巡君は同じ意味である。元・程端学『積斎集』巻4「靈濟廟事跡記」: 「神姓林氏, 興化莆田都巡君之季女。生而神異, 力能拯人患難, 居室未三十年而卒。」

- (7) 張翥は明・永楽7年(1409)の『聖妃靈著録』に、李賢は明英宗天順5年(1461)の『大明一統志・興化府・莆田県』などに媽祖の家系を提示している。
- (8) 丁伯桂・1230年、「順濟聖妃廟記」は通賢神女を「龍女」と見なす：「神莆陽湄洲林氏女，少能言人禍福，歿号通賢神女，或曰龍女。」
- (9) 宋・廖鵬飛『聖墩祖廟重建順濟廟記』，宋・李俊甫『莆陽比事』の「神女護使」条，明・吳還初『天妃娘媽伝』と明・熊龍峰『鏤天妃娘媽伝』，清・『天妃顯聖録』『窺井得符』などに確認できる媽祖の生前事跡に関する記述による。『鏤天妃娘媽伝』は『天妃娘媽伝』の内容を基にして描かれた絵本である。
- (10) 桑悦・1315年，『太倉州志』卷10「舍利性古：昆山靈慈宮原廟記」：「懿哉天妃為德也。托質莆田，爰示有初，或龍或人。」
- (11) 菊地章太(2017)，p. 31と王燕萍(2020a) p. 25を参照
- (12) 藤田明良(2021)は龍王信仰と媽祖信仰の關係について述べた。『山川志』「元進士劉遵魯記略」によれば、「廟曰靈祥，神曰顯應神妃，耆民相伝，為東海広徳王第七女。元得江南幾二十載粮運，所過無風濤之險，豈非神明，有以助之耶」とある。
- (13) T09.105c28-106a03
- (14) 媽祖は五歳から『観音経』を暗誦できたという説がある。また，道士が媽祖に「若具佛性，応得渡人正果」と教えたことから，道教も仏教の衆生救済の方法を認めていることが分かる。
- (15) 「渡人正果」とは，衆生を仏教的な理想の境地に達させ，悟りの果を得させることを言う。
- (16) 仏教が非人倫的であるという非難に対する仏教者の反論については，古田紹欽(1959)を参照。
- (17) 『孟子』「滕文公下」：「不待父母之命，媒妁之言，鑽穴隙相窺，逾牆相從，則父母国人皆賤之」父母の命，媒妁の言を待たずに，堀に穴を空けて互いに相見えたり垣根を越えて互いに逢ひ引きしたりしたら，父母と周りの人たちが皆この二人を蔑む。
- (18) 袋中良定(1608)『琉球神道記』卷五「天妃事」条においては，媽祖は菩薩として認識されている。黒川道祐(1691)『遠碧軒記』下之三「佛事」，p. 162においては，媽祖は天妃菩薩と呼ばれる。「唐の天子后死して観音に変化し水難を救との盟あり，それより舟神とす」と述べている。西川正体(1720)「長崎夜話草」一之巻「野麻権現並日御崎観音之事」，p. 5においては媽祖が観音の化身と見なされる。
- (19) 「羅教」という明・正徳年間(1506-1518)に羅祖が開創した中国の民間宗教は，仏教，道教などの思想と神仏を吸収し，九大老母を崇めた。九大老母の中において，第二位の老母は観音である。老母とは非常に優しい母のようなイメージを表現する言葉である。第五位の老母は送子娘娘(ニャンニャン信仰)

である。「娘娘」とは母、婦人、皇后などの意味を指す。媽祖と観音も「媽祖娘娘、観音娘娘」と呼ばれている。

- (20) 『法苑珠林』は、唐代に道世が著した仏教典籍である。『太平広記』は、北宋・太宗の勅命を奉じて李昉ら12名によって編纂された類書である。『冥祥記』は、中国南朝宋・齊の人である王琰が撰した志怪小説集である。『法苑珠林』巻52:「宋居士卞悦之。済陰人也。作朝請居在潮溝。行年五十未有子息。婦為取妾。復積載不孕。将祈求継嗣。千遍轉観世音經。其数垂竟妾便有娠。遂生一男。元嘉十八年己五歳（右四驗出冥祥記）。」(T53, no. 2122, p. 678b8-12)

- (21) 『圓通三慧大斉道場儀』は宋代において僧侶になる試験の科目書の一つである。

『圓通三慧大斉道場儀』巻4「求男生男」: 按『辯正論』云:「晋王珉無子, 嘗祈観音。後路行逢一胡僧云: 我死, 為君作子。少時道人亡, 而珉妻有孕。及生能語, 即通西域十六国梵音, 聰慧非常, 即尚書王洪明也, 故小名阿練若。」

又按『冥祥記』云:「宋卞悦之年五十無子, 發願誦『観音經』千遍。其数垂畢, 而妻有娠, 生一男。此即經云「求男生男」之明驗矣」

(ZW12, no. 98, pp. 152a13-153a5)

- (22) 『観音經持驗記』は清・周克復が1659年に著した書籍である。観音の様々な靈驗に関する記事が記録されている。『観音經持驗記』巻1「唐衡陽一士人」(X78, no. 1542, p. 98c16-21//Z2B:7, p. 485a7-12//R134, p. 969a7-12)と『観音經持驗記』巻2「元南京大寧坊王玉」(X78, no. 1542, pp. 101c16-102a2//Z2B:7, p. 488a8-18//R134, p. 975a8-18) 参照。

- (23) 『陔余叢考』は清代の有名な詩人であり史学者の趙翼によって著された学術書である。『陔余叢考』巻34:「許洄妻孫氏臨産, 危苦万状, 默禱観世音, 恍惚見白髻婦抱一金色木龍與之, 遂生男。」

- (24) 『観自在菩薩怛𑖀多唎隨心陀羅尼經』(T20, no. 1103b, p. 463c12-15)と『妙法蓮華經』巻7 (T09, no. 262, p. 57a5-9)を参照。

- (25) 観音に祈ることで子宝に恵まれようとする信者は決して高齢の男性だけではない。男性は家主として、家族全員を代表する立場にある。このため、観音が子を授ける物語において、祈る人は多くの場合男性である。これに対し、女性は常に観音の夢を見る役割である。

- (26) 清代の『順徳県志』、『廣州府志』には「迎春日……啖生菜, 春餅, 以迎生氣」という生菜会の記録がある。生菜会は明代から既に流行していた俗習と考えられている。

- (27) 生仔は広東方面の方言である。

- (28) 救民とは言葉通り、民衆を救済することである。しかし、すべての人々を救済するというより、強調された救済の対象は国民である。国家利益を推し進め

る国に属する民衆という「護国利民」の考え方である。中国における観音信仰は、媽祖信仰と同じく「護国利民」の例がある。

(29) 宮川由衣 (2021) p. 33を参照

(30) 『マタイ福音書』, 『マルコ福音書』, 『ルカ福音書』などを参照。

(31) 弥永信美 (2002) pp. 307-309を参照。

(32) Princely Gifts & Papal Treasures: The Franciscan Mission to China & Its Influence on the Art of the West, 1250-1350は、主に13世紀から14世紀にかけてのフランシスコ会が、バックス・モンゴリカのこの時期に中国と活発かつ長期にわたって接触した状況を記録している。彼らは中国に使節団を派遣し、ローマの教皇と北京の元皇帝の間で王子の贈り物を届け合った。

(33) 中国において、子授けと安産を利益する観音は同一に「送子観音」と見なす。